

## ウイグル文慈恩宗文獻「大唐三藏行跡讚」

橘堂晃一

### はじめに

20世紀初頭、プロイセン探検隊がトルファン高昌故城より發掘したウイグル語資料の中に“*Lehrtext*”（教義書）と分類される貝葉形の寫本群がある。これらは『成唯識論』の内容をふまえて、基（632–682）や智周（668–723）の著述或いはその他の經典を合柔して成った、慈恩宗の教義體系を集成した章疏である<sup>1</sup>。今のところ第18章、19章、20章、21章、22章、章數不明の章、そして第30章が確認される。少なくとも30章の分量をもつ大部な注釋書であったことが分かっている。各章の内容とその主たる典據を示すと次のとおりである。

- 第18章 … 初發心因縁と福智資糧（智周『大乘入道次第』）
- 第19章 … 十信、十住（實叉難陀譯 八十卷「華嚴經」）
- 第20章 … 十行、十廻向（實叉難陀譯 八十卷「華嚴經」）
- 第21章 … 順決擇分（『成唯識論』、基『成唯識論述記』など）
- 第22章 … 通達位（?）
- 章數不明 … 佛身（基『觀彌勒菩薩上生兜率天經贊』）
- 第30章 … 大唐三藏行跡讚

本稿が扱う第30章の主題は、慈恩宗の鼻祖たる玄奘（602?–664）の功績を讚嘆することにある。第30章は、章疏全體の結びとしての役割を担っている。玄奘の渡天や譯經事業を独特の注釋方法によって讚嘆するこの章を、本稿では假に「大唐三藏行跡讚」と稱し、筆者が復元したテキストに従ってその概要を紹介したい。

---

<sup>1</sup>本稿は、學位請求論文『ウイグル文慈恩宗唯識文獻の研究』の一部である。なお、本稿でDとGを冠する四桁の數字は、そこで復元されたテキストの行數を示す。

## 1 概観

第30章は、玄奘の求法の足跡とその功績とを注釋文を交えながら讚嘆する、*Lehrtext* の中でもとりわけ異彩を放っている。玄奘の傳記としては『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（以下「慈恩傳」とする）があり、ウイグル文にも翻譯されている。その奥書によると、ベシュバリク (Beš Baliq, 北庭) 出身のシンコ・シェリ・トゥトウング (Uig. Šingqo Šäli Tutung, Chin. 勝光阿闍梨都統。以下、勝光都統) によって翻譯されたことが知られる。勝光都統自身の思想背景に慈恩宗唯識學があったことが推測されている。

注目されるのは、「大唐三藏行跡讚」が獨特の注釋方法を取る点である。まず他のウイグル文の佛典注釋書と同じく、注釋の対象となる地の文を朱砂によって示して解説する<sup>2</sup>。注釋部分は墨書される。朱書された文章は、「慈恩傳」に記される玄奘の事績を踏まえているが、その文章は漢文・ウイグル文「慈恩傳」のいずれとも一致しない点が多い。

このような玄奘に関する注釋書は、漢文資料はもちろん、他の言語資料にも知られていない<sup>3</sup>。この意味において *Lehrtext* は、玄奘研究に對し新たな資料を提供するものである。

## 2 第30章の内容

第30章は、第39葉から第52葉まで斷片的にしか残っていないため、文脈を正確に把握することは困難である。しかし内容、用語、人名などは「慈恩傳」から抽出することができる。以下、順を追って主題ごとに解説する。

### 2-1 三量

周知のとおり、玄奘は当時インドで新たな展開をみていた論理學、すなわち因明學に関する梵本を中國にもたらした。「慈恩傳」は、その數、三十六部を計上している。

「慈恩傳」卷第八によれば、永徽六年に『因明入正理門論』と『因明論』を弘福寺にて譯出している。これに呼應するように *Lehrtext* でも、因明で設定される三つの認識の手段（三量）、すなわち現量（言葉を用いずに對象を直接知覺する認

<sup>2</sup>例えば「法華玄贊」がその代表的な例である。

<sup>3</sup>『東域傳燈目錄』には護命撰『慈恩傳解節記』（四卷）なる書が著録されており、「慈恩傳」の注釋書が撰述されていたことを推測させる (Taishō vol. 55, no. 2183, 1163b27)。

識)、比量(言葉を用いた推理による認識)、聖教量(釋尊によって説かれた教えという判断・認識)に對するウイグル語譯が斷片的に確認できる。

現量 : yügärü köz-ünür ülgü [atɣ ülüg täng] (G0050-G0051)

比量 : [tänglämäk] atɣ ülgü täng (G0051)

聖教量 (?) : [                    ü]z-äki ülgü [täng] (G0052)

現量と比量については「慈恩傳」卷第八にも言及されており、ウイグル文「慈恩傳」にも確認できる<sup>4</sup>、聖教量については「慈恩傳」にも言及がないため、對應するウイグル語を復元することは困難である。

三量の名稱が列擧された後、*ang'ilki*「第一の」(G0053)とあるので、それぞれが詳説されていると推測される。また第43葉にも *ülgü täng* (量) が確認できるので、少なくとも第42葉裏面から第43葉裏面までが三量の解説に費やされている。

## 2-2 佛教の中國公傳

次に第45葉から第48葉まで、後漢明帝期の佛教初傳が説かれる。第46葉に朱書の地の文を保存しており、それに對する注釋が第47葉と第48葉に確認される。これは「周感夜明之瑞，漢通宵夢之徵，騰蘭蕪慧炬於前」(「慈恩傳」卷第八、Taishō vol. 50, 264c19-20)を承けた注釋とみられる。すなわち、明帝が丈六の金人を夢に見て、これを異とした帝が使者を派遣し、迦葉摩騰と竺法蘭を得て、併せて經典と佛像を漢地にもたらしたという。この傳承にはいくつかのヴァリエーションが知られているが<sup>5</sup>、結論から言えば、*Lehrtext* は、『續集古今佛道論衡』所引『漢法本内傳』の傳承に一致する。*Lehrtext* の朱書の部分は次のとおりである。

【*Lehrtext*】 G0095-G0099

(tavγač) elingä tägmädi :: [                    xanme] xan tušinta tü[lintä                    ]

köz-ünmäkdin :: [                    ]lwq y(a)rliγi tavγ[ač elingä                    ] yatildi

…… (中) 國に達しなかつた。…… (漢の明) 帝の御世において、(その夢の中で) ……現れることから……教えが中國 (に) ……流布した。

この部分は「漢通宵夢之徵」に對應する。つづく注釋部分に *čiu čiu on[g]* (G0100)

<sup>4</sup> 「大明立破方軌 現比量門」(Taishō vol. 50, 262b11)。現量 : *közünür ülgü täng* (Xuanzang VIII: l. 1007) ; 比量 ; *tänglämäk atl(i)γ ülgü täng* (Xuanzang VIII: l. 1009)。

<sup>5</sup> Maspero 1910 は①四十二章經、②牟子理惑論、③吳書、④化胡經、⑤後漢紀、⑥後漢書西域傳、⑦冥祥記、⑧出三藏記集、⑨高僧傳、⑩水經注、⑪洛陽伽藍記、⑫漢法本内傳、⑬魏書釋老志が傳える「明帝靈夢」の説話を分析し、年代順に配列し、諸本の系統を明らかにする。

とある。これは「周昭王」のウイグル漢字音表記であり<sup>6</sup>、「周感夜明之瑞」に對應する。「慈恩傳」のこの一文は、釋尊の誕生を昭王治世中の出來事とみなす傳承に基づいている。この傳承を詳細に伝える『漢法本内傳』は、この時の様子について、『周書異記』を引いて「周昭王即位廿四年甲寅歲四月八日，江河泉池，忽然泛漲，井水竝皆溢出，宮殿人舍，山川大地，咸皆震動，其夜有五色光氣，入貫太微，遍於西方，盡作青紅色」と記す<sup>7</sup>。「慈恩傳」に言う夜明の瑞とは、この奇瑞を指す。ちなみに「周感夜明之瑞，漢通宵夢之徵」をウイグル文「慈恩傳」は、以下のように翻譯しており、*Lehrtext*とは異なる。

【Xuanzang VIII】 ll. 894-897<sup>8</sup>

čeu wang atl(i)γ elig y(a)ruqluγ irü b(ä)lgüg kördi ,, xanme atl(i)γ xan tülintä burxan körkin kördi.

昭王<sup>9</sup>という名の王が、光の兆候を見た。漢明という名の皇帝はその夢において佛の姿を見た。

以下、斷片的に残る語句を手掛かりとしてストーリーを復元するならば、*arqis yalavač*「使者」(G0105)は、明帝が天竺に蔡愔をはじめとする使者18人を遣わして、經典と釋迦の圖像を齎したことを指し<sup>10</sup>、さらに *oot*「火」(G0130)や *nomi čin* / *n|omi kümägäy*「法(=經典)が眞で(あれば)經典は燃えないであろう」(G0131-G0132)とは、五嶽の道士らが、帝の佛教への傾倒ぶりに抗議して、道教經典を火にかけて験を取ろうとする、『漢法本内傳』の場面に對應する<sup>11</sup>。筆者の推測が正しければ、ウイグル佛教社會において、佛教の中國公傳は、『漢法本内傳』系統の傳承を通じて認識されていたことになる。

<sup>6</sup>周：tciəu (庄垣内 1986: 143)。昭：tciəu (庄垣内 2003: 130)。王：fiuāŋ (庄垣内 2003: 134)。

<sup>7</sup>敦煌本 Pelliot 3376, 2626, 2862 を校勘した吉岡 1959 のテキストに基づく。吉岡氏はこれらを『漢法本内傳』殘巻と考えていたが、米田 2007 によって『續集古今佛道論衡』であることが明らかにされている。

<sup>8</sup>Xuanzang VIII: 87。

<sup>9</sup>Xuanzang VIII: 87, l.214 は、čyw を「周」と考え、「周王という名の君主」と翻譯した。確かにウイグル文「慈恩傳」卷第八の1494行目のčywčyw は、原典の「周朝」に對應している。しかし『漢法本内傳』の「周昭王」という表現に照らせば、čyw w'nk は「昭王」を指す。

<sup>10</sup>「漢法本内傳云。明帝永平三年，上夢神人金身丈六。項有日光飛在殿前。欣然悅之。明日問群臣。此何為神。有通人傅毅曰。臣聞天竺有得道者，號曰佛也。飛行虛空身有日光。殆將其神乎。於是上悟。遣郎中蔡愔郎將秦景博士弟子王遵等一十八人於大月支中天竺國。寫佛經四十二章藏在蘭臺石室第十四間。又於洛陽城西雍門外為起佛寺。於其壁畫千乘萬騎繞塔三匝。又將畫釋迦立像。乃於南宮清涼臺及開陽城門上，圖佛儀像。時造壽陵，名曰顯節。亦於其上作佛圖像」(『集古今佛道論衡』、Taishō vol. 52, 363c-364a)。

<sup>11</sup>「臣等敢置經壇上以火取驗。欲使開示群心得辨真偽。便縱火焚經。經從火化悉成灰燼。道士等相顧失色大生怖懼」(『集古今佛道論衡』、Taishō vol. 52, 364c)。

## 2-3 曇摩難提と崔殷禮

第 49 葉裏面から第 51 葉は注釋部分である。「慈恩傳」で、往昔の譯經事業には、僧侶の他に在俗の君臣も參劃していたことを説明するくだりにあたる (Taishō vol. 50, 266a)。

*d(a)rma-nante* (G0144) は、曇摩難提 (Skt. Dharmānandin)<sup>12</sup>、*tswynkly atly swnkwn* 「*tswynkly* という名の *swnkwn*」 (G0173) は、「慈恩傳」卷第八の「崔殷禮」であろう<sup>13</sup>。庄垣内氏によって再構されたウイグル漢字音の體系に従えば、「崔」(清母・仄韻 *ts<sup>h</sup>uäi*) は \**swy* もしくは \**tswy*、「殷」(影母・欣韻 *?iön*) は \**'yn* が期待される。「禮」(來母・齊韻 *liei*) は多くの在證例が示すように *ly* と綴られる。従って「崔殷禮」の想定されるウイグル漢字音は、\**tswy'ylnly* である。*tswy* と *ly* とはそれぞれ「崔」と「禮」のウイグル漢字音に合致するが、*-nk-*は「殷」のウイグル漢字音 *'n* を示すには不十分である。ウイグル文「慈恩傳」の對應部分では、*tsaybaγliγ[tun]lii*、即ち「*tsay* 氏の *[tun]lii*」とされている<sup>14</sup>。「殷」でなく「敦」(*tun*) とするのは、『舊唐書』、『新唐書』そして「慈恩傳」の宋元明版が「崔敦禮」とすることを反映している。高麗蔵のみが「殷」に作る。しかし *Lehrtext* の當該部分は、「敦」(端母・魂韻 *tuən*) のウイグル漢字音 *tun /twn/* を書寫した可能性は低いように思われる。従って「殷」と「敦」のどちらにしても問題が残る。あるいは別の漢字を意圖していた可能性もあるが、ひとまず「崔殷(敦)禮」とみておきたい。

また崔殷禮の稱號 *swnkwn* は初出である<sup>15</sup>。ウイグル文「慈恩傳」は、彼の稱號を逐語的に翻譯しており一致しない<sup>16</sup>。當初、筆者は「將軍」に由來する *sangun*

<sup>12</sup> 「符堅時曇摩難提譯經、黃門侍郎趙整執筆」(Taishō vol. 50, 266a21-22)。一方、ウイグル文「慈恩傳」は、竺法蘭と混同し、*d(a)rmarđi* と誤って綴られる。Xuanzang VIII: l. 1480。

<sup>13</sup> 崔殷禮は、太宗が玄奘の譯業を贊助せよとの勅令を傳達する人物として「慈恩傳」にみえる。「壬辰光祿大夫中書令兼檢校太子詹事監修國史柱國固安縣開國公崔殷禮、勅を宣して曰へらく。大慈恩寺僧玄奘の翻せる所の經論は既に新しく、翻譯の文義は須らく精しかるべし。宜しく太子太傅尚書左僕射燕國公于志寧、中書令兼檢校吏部尚書南陽縣開國男來濟、禮部尚書高陽縣開國男許敬宗、守黃門侍郎兼檢校太子左庶子汾陰縣開國男薛元超、守中書侍郎兼檢校右庶子廣平縣開國男李義府、中書侍郎杜正倫等をして時に看閱を為し、穩便ならざる處有れば、即ち隨事に潤色せしむべし。若し學士を須むれば、三兩人を量追することを任す」(Taishō vol. 50, 266b04-14)。

<sup>14</sup> Xuanzang VIII: 136, ll. 1537-1538。 *tsay* は「崔」 *tswy* と適合しない。松井太氏と笠井幸代氏から、「雀」(精母・葉韻 *tsiǰak*) と誤っているのではないかとの指摘をいただいた。筆者も兩氏の意見に従いたい。

<sup>15</sup> 語頭の *s* はやや丸みを帯びているため、*q* と混同されるかもしれないが、*s* で間違いない。同じ 30 章の *q* は、下部が球状になっているのに対し、*s* は左斜め下に向かう線により區別されている。

<sup>16</sup> Xuanzang VIII: 136, ll. 1530-1538。

*y(a)roq levlig uluryär iç bitiglik başči, yänä ägrilärig köntürdäči t(ä)rkän tegin tapıγčisi*  
光祿 大夫 中書令 兼 檢校 太子 詹事

の異形と考えていた。sangun はイエニセイ碑文やウイグル語の世俗文書、佛典の識語に頻出するウイグル社會で一般的な稱號である。しかし2文字目は、はっきりと w が判讀できるので、sa と讀むには無理がある。ここでは「總管」(總：精母・東韻 tsuŋ。管：見母・桓韻 kuan) のウイグル漢字音と考えたい<sup>17</sup>。ウイグル文「慈恩傳」では「總管」をウイグル漢字音で表記せず、*yumγi bašlatači* 「皆を導く者」と意譯する<sup>18</sup>。一方、「總管」のウイグル漢字音による表記は、榆林窟や莫高窟にウイグル佛教徒が記したモンゴル期の銘文に *swnkkwn* (*sunggon*) として在證がある<sup>19</sup>。*Lehrtext* の表記では k が一つ足りないが、連続する同一文字の一方を書き忘れたものとみておきたい。

## 2-4 渡天・取經・譯經の讚嘆

保存状態が比較的よい第 55 葉から第 59 葉は、玄奘がインドに渡り、大乘法をもたらしたこと、その後の譯經活動を讚嘆する地の文とそれに對する注釋からなる。以下、セクションごとに内容を紹介する。

### セクション 1：注釋文【*Lehrtext*】 G0188-G0204

「慈恩傳」に對應する語句は見いだせない。「～ temäk sav ~ temäk söz birlä qoş körši ärür (～という言葉は～という語と對應する)」という形式をもつ注釋文の中から地の文(「～」部分)を回収できる。

### セクション 2：地の文【*Lehrtext*】 G0218-G0257

次に「八解脱にある眞實がとどまることを以て清らかとなり、邊際のカピラヴァストウの町に顔に皺よせて歩んだ。身體を捨てて法を求めた。命に重きを置かなかつた。インドの地へと渡ろうと欲した。現れないことによって命を生ずる智慧もてる天の心と一つとなっていて、ただ假に少しばかり學び教える資糧に頼った。決して虚誑の福德によってその違いを現しているのではない。眞實の福德の集積によって、集めたる聖なる福德が導いたものと言われる。聖なる八塔の遺跡を全て踏破した。六つの密義の宮殿である大乘法を究めた」と讚嘆する。難解な文章だが、「慈恩傳」卷第八「玄奘法師頭陀法界，遠達迦維，目擊道樹金河，仍觀七處

---

el uluṣ savin kördäci bašlat(a)či, el tirgöki tī ornaγlīγ harīta el ačtači bāg  
 監修國史 柱國 固安 縣 開國 公  
tsag baγlīγ [tun]lii  
 崔 殷禮

<sup>17</sup> 「總管」については、松井太氏よりご教示いただいた。この場を借りて感謝の意を表します。

<sup>18</sup> Xuanzang VIII: l. 1616。

<sup>19</sup> Matsui 2008: 23, 脚注 10 参照。

八會，毘城鷲嶺，身入彼邦，娑羅寶階，仍驗虛實。至如歷覽王舍檀特恒河，如斯等輩，未易具言也」(Taishō vol. 50, 264b03-07)を念頭に置いた文であろう。「六つの密意の宮殿である大乘法」とは、伝統的な大乘經典の分類としての般若・法華・華嚴・涅槃・寶積・大集の六部か、もしくは慈恩教學における三性(遍計所執性、依他起性、圓成實性)と三無性(相無性、生無性、勝義無性)を指すのかもしれない。

次に玄奘の譯業が、羅什(Kumārajīva)や眞諦(Paramārtha)を引き合いに出して稱揚される。すなわち「パラマールタ(眞諦)という名の阿闍梨が、その名聲を廣めるために Seme-lun<sup>20</sup> のなかで「無」を讚嘆し、クマラジーヴァ(鳩摩羅什)という名の阿闍梨がその名聲を高めるために「空」を『中觀論』のなかで讚えたようなものでは決してない」と述べられる。ここに玄奘が名利を求めて譯業に従事したのではないことを強調する撰述者の意圖が読みとれよう。眞諦、羅什のマイナス評価は、*Lehrtext*の著者の無知というよりも、意圖的なものと考えられる。即ち、羅什を非難することで中觀派を、眞諦を非難することで攝論派を貶めようとしている。これにより玄奘の唯識教學の正當性と聖人としてのイメージをより強固なものにしている。

### セクション3：注釋文【*Lehrtext*】G0275-G0424

セクション2に対する注釋文である。「三つの輪にある寶もてる(行い)によって急ぎ、遠く金色の沙河の … 町へ行った」(G0307-G0309)とは、「慈恩傳」の「遠達迦維，目擊道樹金河」に對應する。「三つの輪」とは「慈恩傳」にはみえない表現であるが、*Lehrtext*では三神通(神足通、他心通、宿命通)を指す。玄奘はこれを用いてカピラヴァストゥ(迦維)やクシナガラ(金河)をはじめとする釋尊の聖跡を巡禮したと説明される。續く G0332-G0349には、八解脱のうち第二から第八までが列擧されているので、セクション2の *säkiz qutrulmaq-daqi kertü*「八解脱にある眞實」(G0218)に對する注釋となっている。

セクション2の地の文「ここにおいて再び身體を捨てて法を究めた。命に重きを置かなかつた。インドの地へ渡ろうと欲した」、そして「現れないことを、命を生じない智もてる天の心に同一であるとして、ただ假に少しばかり學び教える資糧に頼った」(G0363-G0378)とは、玄奘がシーラバドラ(戒賢)の下で『瑜伽師事論』を学んだことを顕彰するための文章であると説明される。さらにそのことを文殊、觀音、彌勒の三菩薩が出立前の玄奘に夢告したという(G0372-G0378)。しかしながら「慈恩傳」卷第三で菩薩の夢を見たのは戒賢である。すなわち「支

<sup>20</sup>ウイグル漢字音で「淨名論」もしくは「聲明論」を想定できるが、眞諦の翻譯、著述のなかに『淨名論』、『聲明論』は知られていない。

那國」より大法を學ぶべく彼の下を訪れる者が現れるとの予言を文殊菩薩から授かっている<sup>21</sup>。これに對してウイグル文「慈恩傳」の同じ箇所では、原典に忠實に翻譯されている<sup>22</sup>。

つづけて地の文「(玄奘は) 眞實の福德の集積による、集積した聖なる福德の導き」(G0380-G0383) を持っていたので、求法の旅にも支障がなかったと言われる。その證として高昌王麴文泰から受けた支援が説明されるが、ここでも内容が改變されている。以下は、高昌に到着した玄奘を麴文泰が出迎える場面である。

【*Lehrtext*】 G0385-G0394

kim bo ačari k(ä)ntü qutı ülügi üz-ä tavγač-din kälip qamıl-qa tägdük-tä qočo xanı äšidip iki yğirmi käväl qamıl-qa utru itip ayayu čiltäyü kälürtdi „ qočo-qa tün yarımınta tägdi xan özi utru önüp qapıγ ačturup,, k(ä)ntü özi yadaγ yorip oot-in oduz-up ordu-qa kigrürtdi „ ulatı toquz on kün ordu-ta tutup ülgüsüz üküš ayay čiltäg tapıγ uduγ qilip tört otuz at „ tört otuz …

「この阿闍梨が自身の福分によって中國から來てハミに到達した時に、高昌王は〔それを〕聞いて十二頭の駿馬を直ちに送って恭敬に寄こした。高昌には夜半に到着した。王は自ら勇み出て門を開けさせて、自らの足で歩み寄り、火を持って宮殿へ導き入れた。さらに九十日の間、宮殿に留めて、數えきれないほどの多くの恭敬供養をなして、二十四匹の馬、二十四の … (以下缺)」

「慈恩傳」の原文は以下のとおり。

「時高昌王麴文泰使人先在伊吾，是日欲還，適逢法師，歸告其王。王聞即日發使，勅伊吾王遣法師來，仍簡上馬數十匹，遣貴臣驅駝設頓迎候。比停十餘日王使至，陳王意，拜請殷勤。法師意欲取可汗浮圖過，既為高昌所請，辭不獲免，於是遂行，涉南磧經六日，至高昌界白力城。時日已暮，法師欲停，城中官人及使者曰，王城在近請進。數換良馬前去，法師先所乘赤馬，留使後來。即以其夜鷄鳴時到王城。門司啓王，王勅開門。法師入城，王與侍人前後列燭自出宮，迎法師入後院，坐一重閣寶帳中」(「慈恩傳」 Taishō vol. 50, no. 2053, 224c14-26)

話は概ね一致するが、數詞には異同がある。麴文泰が玄奘の到着を聞いて伊吾す

<sup>21</sup> 「慈恩傳」卷第三の原文は次のとおり。「去三年前、苦痛尤甚、厭惡此身、欲不食取盡。於夜中夢三天人，一黃金色，二琉璃色，三白銀色，形貌端正，儀服輕明，來問和上曰。汝欲棄此身耶。經云。說身有苦，不說厭離於身。汝於過去曾作國王，多愍衆生，故招此報。今宜觀省宿愆，至誠懺悔，於苦安忍，勤宣經論，自當銷滅。直爾厭身，苦終不盡。和上聞已，至誠禮拜。其金色人指碧色者語和上曰。汝識不。此是觀自在菩薩。又指銀色曰。此是慈氏菩薩。和上即禮拜慈氏。問曰。戒賢常願生於尊處，不知得不。報曰。汝廣傳正法，後當得生。金色者自言。我是曼殊室利菩薩。我等見汝空欲捨身，不為利益，故來勸汝。當依我語，顯揚正法瑜伽論等，遍及未聞，汝身即漸安隱，勿憂不差。有支那國僧樂通大法，欲就汝學，教之」(Taishō vol. 50, 236c25-237a13)

<sup>22</sup> Xuanzang III: ll. 419-466.

なわちハミに送迎に遣わした馬は原文では「數十匹」であるのに對して、*Lehrtext* は「十二頭」と具體的である。また玄奘が高昌に滞在した期 についても、原文では「仁王經」を一ヶ月講じたこと以外、具體的な日数は示されていないにも関わらず、*Lehrtext* はこれを九十日とする。そして玄奘の出立に際し、供出された馬は「三十匹」であるのに對し、二十四匹とされている。これらの數詞の相違に特別な意味が込められているのか、それとも單なる誤記なのか不明である。しかし上に述べたような意圖的に潤色した例があることに鑑みれば、ここも意圖的な操作が加えられているとみることができよう。

以下 G0395-G0424 は、セクション 2 地の文 G0231-G0234 に對する注釋部分である。玄奘が八大靈塔を巡禮したこと、そして大乘法の學習に研鑽を積んだこと、教えを故國に傳え、人々を安穩ならしめんと欲して歸國したことが顯彰される。第 30 章はここで途切れている。

### 3 八大靈塔について

第 30 章の成立過程を知る上で注目されるのは、「聖なる八塔の遺跡を全て踏破した。六つの密意の宮殿である大乘法を究めた」(G0396-G0399) とする地の文である。「八塔の遺跡」とは、いわゆる八大靈塔を指すとみられるが、それぞれの名稱は明示されていない。「慈恩傳」及び『大唐西域記』は、釋尊の生涯における重要な出來事が起きた聖迹としての「七處八會」や「塔」を訪ねたことを詳細に記録する。しかし「八大靈塔」(iduq säkiz čayti-liriz uruq) に該當する表現はなく、その概念は希薄である<sup>23</sup>。

これと關連して興味深いのは、以下に挙げるウイグル語『金光明最勝王經』(Uig. *Altun Yaruq*) のレニングラード本の序の冒頭部分である。

【*Altun Yaruq*】 4S2

t(ä)ngri tavγač xan ödinte gitso samatso atly bodistv açari küntin yingaq suv yolinta kitip änätkäk yiringä barip :: tükäl bilgä t(ä)ngri t(ä)ngri burxanning iduq qutluγ säkiz čayti qılmış yer orunlarin tükäl körüp otuz artuq uluγ el ulušlaririz käzip y(i)g(i)rmi yili töni yorip bo nom ärdini başlap älig tümen šlöklüg qamaγ sanı tört yüz …

<sup>23</sup>戒日王の作と伝えられ、北宋の西天譯經三藏法賢が翻譯した『佛說八大靈塔名號經』(Taishō vol. 32, no. 1685) によれば、八大靈塔とは、①佛生處である迦毘羅城、②成道處である摩伽陀國、③初轉法輪の迦尸國波羅奈城、④雙神變を示現した舍衛國祇陀園、⑤三道寶階降下の曲女城、⑥聲聞分別佛爲化度處たる王舍城、⑦思念壽量處たる廣嚴城、⑧涅槃處の拘尸那城とされる。

天なる中國の皇帝の御世、義淨三藏という名の菩薩は東の方、水の道より往きて、インドの地へと向かった。一切智者、天中天なる佛の聖なる福德を有する八つのチャイティヤ (*īduq qutluγ säkiz čayti*) が残る場所を全て目にして、三十以上の大國を訪れ、二十年歩んで、この法寶をはじめとして、五十萬頌、總じて四百…… (以下、缺)

この文章は『宋高僧傳』の義淨傳を踏まえて書かれている<sup>24</sup>。義淨もまた佛跡を巡禮したが、『宋高僧傳』ではわずかに「鷲峯雞足咸遂周遊。鹿苑祇林並皆瞻矚。諸有聖迹畢得追尋」と伝えられるにすぎない<sup>25</sup>。*Lehrtext* と同じように原文には存在しない「八大靈塔」の概念が取り入れられていることがわかる。

*Altun Yaruq* の序には、本来『金光明最勝王經』とは無關係の「四天王讚」と「八大靈塔讚 (*säkiz qutluγ orunlardaqi čaytilarniŋ ögdisi*)」とが挿入されている。とくに後者はアモーガシュリー (*Uig. amogaširi < Skt. amoghaśri*) によってサンスクリット語 (*änätkäk tili*) から翻譯されたものであり、そのタイトルからも明らかのように「八大靈塔」信仰を稱揚するものである。そこで対象として挙げられているのは、①カピラヴァストウの佛生處、②マガダ國の成道處、③コーサラ國のバーラナシーの初轉法輪處、④シュラーヴァスティーの神變處、⑤サンカーシャにおける三道寶階降下處、⑥ラージャグリハにおける聲聞分別佛爲化度處、⑦ヴァイシャーリーにおける思念壽量處、⑧クシナガラの般涅槃處である。これは漢譯『佛說八大靈塔名號經』のそれと一致する。

またこれとは別のテキストに属するウイグル文 *Caitya Stotra* が Zieme 氏によって紹介されている<sup>26</sup>。このテキストは第二、第四の靈塔の記述を部分的に保存している。第二靈塔は「八大靈塔讚」に言う「成道處」と一致するが、第四は「三道寶階降下處」となっており、「八大靈塔讚」の順序と異なる。「八大靈塔」信仰に關していえば、少なくとも二種類の傳統が存在していたことになる。以上のような背景には、ウイグル佛教社會における「八大靈塔」信仰の浸透があったと考えられる。

*Altun Yaruq* には、義淨譯『金光明最勝王經』にはない、法相宗典籍からの引用文が隨所に盛り込まれている。筆者はこれを *Lehrtext* と同じ思想に立脚した唯識文獻と位置付けている。また *Lehrtext* と *Altun Yaruq* において、玄奘と義淨が八大靈塔を巡禮したと言及される事實も考慮に入れると、この兩文獻が非常に近

<sup>24</sup>「初至番禺得同志數十人，及將登舶餘皆退罷。淨奮勵孤行備歷艱險。所至之境皆洞言音，凡遇酋長俱加禮重。鷲峯雞足咸遂周遊，鹿苑祇林並皆瞻矚。諸有聖迹畢得追尋，經二十五年歷三十餘國。以天后證聖元年乙未仲夏還至河洛。得梵本經律論近四百部，合五十萬頌」(Taishō vol. 50, no. 2061, 710b)

<sup>25</sup>『宋高僧傳』卷第一 (Taishō vol. 50, no. 2061, 710b12-17)。

<sup>26</sup>Zieme 2007。

い関係にあると想定することが許されるであろう。 *Lehrtext* と *Altun Yaruq* とは、成立過程を研究する上で相互に補完しうる資料となる可能性を秘めている。この点については稿を改めて論ずることにしたい。

#### 4 注釋方法

第30章の注釋方法には一定の手順が認められる。以下に文例を挙げて示したい。

手順①：まず對稱性をなす二つの對句を提示し、それが何を顯彰しているのかが説明される。ここでは共通する特徴的な表現（*muntaγ temäk üzä ~ uqitur* 「このように言うことにより～を顯かにする」）が用いられる。

【*Lehrtext*】 G0396-G0401

tükäl irklädi iđuq säk[iz] čayti-līγ iz uruquγ,, tüpgärü altı ki[z]-läglic yörüg-lär ordusı m(a)xayan nomuγ tep tedi ,, muntaγ temäk üz-ä änätkäk-kä tägmiš-däki yoriγin işin küdükin uqitur

「(大唐三藏は) 聖なる八塔の遺跡を全て踏破した。六つの密義の宮殿である大乘法を究めた」と言った。このように言うことにより、インドに到達したことの功績を顯かにする。

【*Lehrtext*】 G0371-G0374

muntaγ temäk üz-ä ayaγ-qa tägimlig tayto samtso ačariγ änätkäk-dä šilabadre ačari-ta saptadašabumag atly yoog-šastr bošγunγali barmišin uqitur

このように言うことによって、尊者大唐三藏阿闍梨がインドのシーラパドラ（戒賢）阿闍梨のもとで *Saptadašabhūmika* と名付ける瑜伽論を学ぶために行ったことを顯わす。

同じ注釋方法は *Lehrtext* 第21章とウイグル文「法華玄贊」にも確認できる。

【*Lehrtext*】 D0102-D0109

amtı bo šlok-nung yörügün söz-lämiš k(ä)rgäk ,, q(a)ltı bo šlok-nung baštinqı p(a)dakınta ,, ,, yügärü qılmaqları üz-ä az-qya ädig tep tedi ,, muntaγ temäk üz-ä tavrannaq tuš içintä bodistv-lar barlı yoqlı iki bälgü-läriγ kördüktä taqı ančaγya barlı yoqlıqı ilinmäk-läri bolur tep uqitur

今この偈の義を説くべし。謂く、この偈の最初の句にて「少物を現前に作ることにより」と言った。このように言うことにより、加行位の菩薩らは有と無の二つの相を觀じた時に、さらに若干の有と無に執着する者となる、と顯らかにする。

【法華玄贊】 Hedin 資料 No. 41, ll. 4-6 (百濟 1983)

muntaγ temäk üz-ä ikinti sez-ingülük tıltaγ-ın sözlämäkig uqitur

このように言うことによって、第二の疑うべき因を説くことを顯わす。

【法華玄贊】 Haneda Photo No. 34, ll. 3-9 (百濟 1983)

saviγ äšidip ürküp bäl(ing)ä-/// ol äv-kä eyin yaraγinča oγlan-larin osγurγali  
qutγarγali kim ol örtänü turur [oo]t-qa küyürmägäli tep [te]m[äk] üz-ä adinčiy///  
qa(ma)γ-liy üz-ä n(iz)-vani ängäk yantur tuγmak-in uqitmaq

「語を聞きて驚怖…その家に、宜しく子らを救済せんが爲に、およそその燃ゆる火で焼かぬ爲に」と言うことによって、殊に ……總じて煩惱、苦が還って生じることを顯わすこと。

「法華玄贊」に照らせば、uqitur は「陳述」もしくは「告」に對應する。アビダルマ文獻でも同様に「申」「建立」「顯」など様々な術語に適用される<sup>27</sup>。専ら引用された經文の後に使用される表現である。

手順②：續いて一句ごとの解説と術語の説明がなされる。

【Lehrtext】 G0401-G0409

tükäl irklädi iduq säkiz čayti-liγ iz uruquγ temäki ärsär ,, kim bo säkiz türlüg  
qutluγ yer orun-lar-qa tüz-kä tägmišin biltürür ,, säkiz čayti-liγ iz uruq ärsär ,,  
tükäl bilgä t(ä)ngri t(ä)ngri.....

「聖なる八塔の遺跡を全て踏破した」とは、誰がこの八つの福德ある地の全てに到達したのかを知らしめる。「八つの聖なる塔」とは、一切智天中天なる（佛）……

手順③：最後に二つの句の内容上の關係性が強調される。Lehrtext はこのセンテンス・術語ごとの繋がりを qoš körši と表現する。P. Zieme 氏はこの對稱性を重視した表現形式を metaphor text と稱し、qoš körši を “comparable and parallel” と理解する<sup>28</sup>。qoš körši を直譯すれば「向かい合う一對」となるが、ここでは假に「對應する」と譯しておきたい。

【Lehrtext】 G0303-G0306

bi[lgä] biliglig köl-dä temäk sav ašnuqi t[amitmiš] uluγ y(a)ruqluγ ärür köngül-  
lüg qaliγ-ta tegüci söz birlä qoš körši tetir

「智慧の湖よりも」という言葉は、先の「虚空から落ちた大光明である」という言葉と對應する。

【Lehrtext】 G0364-G0368

munta y[änä] titdi ät'öz-in tilädi nomuγ temäk sav basaqi inγaladi isig özin ,,  
küsädi änätkäk yeringä ötgäli tegüci söz birlä qoš körši tetir

<sup>27</sup>庄垣内 2008 の索引 uqit-の項を参照せよ。

<sup>28</sup>Zieme 2007: 165。

「ここにおいて再び身體を捨てて法を求めた」という言葉は、次の「命に重きを置かなかった。インドの地へ渡ろうと欲した」という言葉と對應するとされる。

【*Lehrtext*】 G0410-G0413

[i]duq säkiz čayti-līγ [i]z uruquγ temäk sav kiz-läglig yörüg-lär ordusī m(a)xayan nomuγ tegüči söz birlä qoş körši tetir

「聖なる八つの塔の遺跡を」という言葉は、「密義の宮殿である大乘法」という言葉と對應するとされる。

朱書の地の文の全體像がわからない以上、この注釋形式が地の文の内容を理解する上でどのような効果をもったかは明らかでない。しかしこの注釋方法が、地の文の内容理解を助ける働きを持っていたことは疑いのないところである。それと同時に、詩的技巧に注意を喚起している點も注目される。對句表現を好んだウイグル人にとって修辭學上、十分に意味のある注釋であったと思われる。

## 5 第30章と「慈恩傳」の指向性

第18章から第22章、そして番号不明の章は、『成唯識論』を基底としつつ、種々の章疏を織り交ぜたものであった『成唯識論』は玄奘と基によってダルマパーラの説を中心に十師の説を合採された慈恩宗の基本聖典である。慈恩宗において鼻祖と瞻仰される玄奘の立場を考慮するならば、第30章は自宗の鼻祖を讃嘆するために *Lehrtext* の後序として付された章であるとみなすことができよう。『瑜伽師事論』には中書令臣許敬宗の文章が後序として付されていることなどが参考になる。

玄奘の聖人化は、既に「慈恩傳」にも認められるところである。一方、ウイグル文「慈恩傳」には單純な誤讀もあるが<sup>29</sup>、中には意圖的にコンテキストを改變および潤色した痕跡が認められる。

P. Zieme 氏の研究によると、玄奘示寂に際し、西の方角に手をかざすと、「寺主慧徳、又夢に千軀の金像が東方より來下して翻經院に入り、香華空を滿たすを見る」とするところを、ウイグル文は、これに加えて「西北の方角の道を開く」という原典にはない文言が付加されている。これは釋道安(314-385)の傳記で、西北の方の道が開いて、兜率天を見たという表現と一致し、願兜率往生者としての玄奘を強調した表現とみたのである<sup>30</sup>。

<sup>29</sup>原典の「仍擇山澗僻處」の「仍擇山」を žing čay šan atly tay da (žing čay šan という名の山で)と固有名詞と誤って翻譯する(庄垣内 1986: 21)。

<sup>30</sup>Zieme 1990。

また、K. Röhrborn 氏も、ウイグル文の翻譯者、勝光都統が、駢儷體の難解な表現を佛教的なコンテキストへと轉換し、また道教や儒教への言及、歴史的内容をもつ文章を意圖的に削除していることを指摘する<sup>31</sup>。以下に氏が紹介する例を挙げしておく。

【慈恩傳】卷第八

素天初兔，鑒月殿而澄輝。薰徑秋蘭，疎庭佩紫。(Taishō vol. 50, 267a12-13)

(素天の初兔、月殿を鑒らして輝きを澄ます。徑に薰れる秋蘭、疎庭に紫を佩ぶ)

これは宰相が譯業を扶けてくれたことに對して、玄奘が謝意を表わす一節である。對應するウイグル文は次のように翻譯される。

【Xuanzang VIII】 ll. 1830-1836

kök t(ä)ngritä äng bašlayu tavišγan tamγaliγ ay t(ä)ngri ordusün körüp votu-  
čeng atliγ ačari ävirniš nomuγ yaltritm(i)z,, d(a)rmarate ačari aqtarmiš bitigig  
uqitγuluq ediz körklä len p(a)ryanlar etdim(i)z

私たちは、天に最初に兔の印もてる月天の宮殿を見て、佛圖澄という名の阿闍梨が譯した法を輝かし、竺法蘭という名の阿闍梨が翻譯した經典を讀むための高くて美しい房室を建てた。

「佛圖澄」を「澄」、「竺法蘭」を「蘭」だけで表記する例は「慈恩傳」にも頻出するので、おそらく勝光都統はこのことを踏まえた上で、原典では「澄ます」と動詞として理解されるところを佛圖澄として、また植物名である「秋蘭」を「竺法蘭」と理解している。これが單なる誤讀でないとすれば、慈恩寺の情景を描き出した原文を、より佛教的な内容に變えているとみなすことができよう。ウイグル文「慈恩傳」において玄奘が菩薩（菩薩大唐三藏 *bodistv taito samtso*）とみなされる所以である。一方、*Lehrtext* も玄奘の事績を稱揚するためならば原文を無視して改變することを厭わないことは先に見たとおりである。玄奘の聖人化という點においてウイグル文「慈恩傳」と *Lehrtext* は軌を一にしている。

## 6 むすびにかえて

以上に述べた *Lehrtext* の對句表現や玄奘の聖人化といった特徴からいえば、第30章「大唐三藏行跡讚」は、ウイグル佛教徒によって著されたと考えるのが自然である。さらに唯識思想を共通の背景に持つ點で、「慈恩傳」、『金光明最勝王經』

<sup>31</sup>Röhrborn 1997。

の翻譯者である勝光都統との繋がりを強く想定させる。残念ながらそれを立證することはできないが、たとえ勝光都統の著述でなかったとしても、彼と同時期もしくは後代の同じ學系に属する人物の手になるものであることは確實である。

#### 略號

Taishō	大正新脩大藏經
Xuanzang III	Ölmez, Mehmet and Röhrborn, Klaus 2001
Xuanzang VIII	Röhrborn, Kraus 1996

#### 参考文献

##### <日文>

- 百濟康義 1983: 「妙法蓮華經玄贊のウイグル譯斷片」『内陸アジア・西アジアの社會と文化』、185-207.
- 庄垣内正弘 1986: 「ウイグル文獻に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』II、神戸市外國語大學、17-156.
- 庄垣内正弘 2003: 『ロシア所藏ウイグル語文獻の研究——ウイグル文字表記漢文とウイグル語佛典テキスト』、京都大學大學院文學研究科.
- 庄垣内正弘 2008: 『ウイグル文アビダルマ論書の文獻學的研究』、京都：松香堂書店.
- 吉岡義豊 1959: 『道教と佛教』第一、東京：國書刊行會.
- 米田健志 2007: 「敦煌本『續集古今佛道論衡』と『漢法本内傳』の偽作とについて」『敦煌寫本研究年報』創刊號、119-135.

##### <歐文>

- Maspero, Henri 1910: Le songe et l'ambassade de l'empereur Ming. Étude critique des sources, in: *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* X, 95-130.
- Matsui, Dai 2008: Revising the Uighur Inscriptions of the Yulin caves, 『内陸アジア言語の研究』23, 17-33.
- Ölmez, Mehmet and Röhrborn, Klaus 2001: *Die alttürkische Xanzang-Biographie III: Nach der Handschrift von Paris, Peking und St. Peterburg sowie nach dem Transkript von Annemarie v. Gabain*, Wiesbaden.
- Röhrborn, Klaus 1996: *Die alttürkische Xuanzang-Biographie VIII*, VdSUA Band 34. Wiesbaden.

Röhrborn, Klaus 1997: *Die alttürkische Xuanzang-Vita: Biography oder Hagiography?*. in: *Bauddhavidyāsudhākaraḥ. Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of his 65th Birthday*, (Indica et Tibetica 30). Swisttal-Odendorf, 551-557.

Zieme, Peter. 1990: Xuanzang Biographie und das Xiyuji in alttürkischer Überlieferung, in: Laut, J. Peter and Röhrborn, Kraus. (eds.): *Buddhistische Erzählliteratur und Hagiographie in türkischer Überlieferung*. (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 27). Wiesbaden, 75-107, 17 plates.

Zieme, Peter. 2007: Caitya Veneration – an Uighur Manuscript with Portraits of Donors, in: *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 2, 165-172.

(作者は龍谷大學西域文化研究會研究員)